幻想に誘われる「壁画古墳」

増山雄三

飛鳥の高松塚古墳が、彩色鮮やかな壁画古墳と分った時、天智帝五年（六六六に日本にやってきた、満州の草原の中に住んでいた、**高句麗国**の国史だった首長が、その被葬者ではないか、と思われていた。

彼らは、漢民族とは人種も言語も異にし、社会の仕組みは、騎馬民族と共通したものを持っているが、早くから漢民族文化と接触していたので、ゴビ砂漠の周辺にいる連中よりは、遥かに農耕的になっていて、また、優れた移入文化を持っていたという。

この高句麗人は、北朝鮮の**扶余**へ南下し、扶余族とも呼ばれたたが　南朝鮮人より背が高く、固有満州人に近かったので騎射も巧みなので、軍事的には、農民になっていた、南朝鮮の新羅人や百済人より、牧畜民族的な野

趣を、強く持っていたのである。

それで、朝鮮史で言う、高句麗・新羅・百済の三国時代の五八五年に、中国の隋帝国が高句麗に攻め込んできたが、当時の高句麗は今の平壌を首都としつつ、故地である南満州の殆どを領有し、遼東半島や無順それに藩陽なども、全て高句麗の領土だった。

隋にとっては、辺境のわずらいを、未然に防ぐための武力行使だったが、逆に高句麗に負けてしまい、この敗北が、隋という短期帝国の衰亡原因の一つになり、代わって、大唐帝国の出現を促がす結果になった。

それでこの唐が、大規模な軍をおこして攻めてきて、戦争状態は二十年間続いたが、ついに六六八年に平壌は陥落して、高句麗は滅ぶが、この間、半島の情勢は混乱し、唐は高句麗攻撃中に、新羅と同盟を結んで、百済は日本へ救援を求めてきた。

当時、日本も隋唐帝国の出現の心理的大津波をうけ、大急ぎで中央集権の国家形態を整

えて、万一の侵略に備えるべく、いわゆる、「**大化改新**」を進行させつつあった。

当時、日本における政策決定者は、国際情勢に過敏すぎる傾向を持った、後の**天智天皇**となる**中大兄皇子**で、彼は百済救済のため出兵したが、その水軍が**白村江**で、唐の水軍と戦って全滅し、六六三年に百済は滅亡してしまい、ついで五年後には、百済と同盟していた、高句麗も滅亡してしまった。

それで、日本書紀では、高句麗を**高麗**と書き**コマ**と読むが、この鴨緑江流域の大国と日本との関係は、南朝鮮の新羅や百済と比べて割合と薄いが、濃密になるのは、隋の勃興で圧力を受けてからで、高句麗が隋を敗走させて、推古帝二十六年（六一八）に国史をよこして、戦利品の鼓や笛などを齎している。

それから半世紀経ち、冒頭に触れた天智帝五年に、高句麗の**玄武若光**という国史がやってくるが、その慌ただしさというのは、高句麗情勢の緊迫化を感じさせ、それは、恐らく

救援を乞うものだったのだろう。

しかし、天智帝としては、百済を援けるため、その三年前には、白村江で大敗し、その始末のため混乱していたので、高句麗を援ける軍事的余裕などなく、これを断った。

ところで、高句麗族というのは、満州を故郷とする騎射が上手いという、ツングースのよき蛮性を残していると共に、その文化吸収力の創造性能力というのは、温暖な農耕地で国を作っていた、百済や新羅よりも、むしろ上位に位置するのかもお知れない。

というのは、富強もさることながら、一つには歴史地理的に高句麗は有利で、かつて朝鮮にあった、漢の郡県のあとに国が出来たため、四百年続いた漢文化を、まるまる、自分のものにする事が出来たからである。

そういった素地の上に、隋唐以前には、中国の南北朝時代には、高句麗は南北朝とともに、万遍なく交通し、南北朝の文化を総合的に取りいれ、その事は、この華麗な壁画古墳

の、絵画技術や画題を見ても分る。

もっとも、高句麗の壁画古墳の壁画については、印刷物でしか知らないが、有名な**舞踏塚**における、騎馬狩猟図天王地神塚の天王図を見ても、古拙さなど全くなく、様式の完成の高さは比類なく、**竹原古墳**の壁画などと比べても、技術の上では別格である。

それで、高句麗古墳の壁画テーマの特色というのは、**天体と方角**とが描かれている事であり、天体として**日月星辰**が描かれ、方角の神として、**青竜**、**白虎**、**玄武**、**朱雀**という、四種の怪動物である、四神が描かれる。

それで、今回発掘された高松塚古墳の奥には、それらが鮮やかな色彩と技術をもって、見事に描かれているというのは、遠い昔の遠い国だった高句麗国から、墳墓だけが、突然ここに、舞い降りてきたような感じである。

また、この古墳の壁画には、被葬者の生前の光景が主題になっていたりするが、高松塚古墳でも、被葬者が交じっていると思われ、

四人の男子像のほか、四人の若い婦人像が描かれているが、彼女らは、高句麗古墳にある像と同様に、裾にギザギザのフリルがついている、スカートをはいている。

それでも、被葬者が日本の高官や豪族としたら、在来の様式で葬礼されるのが常識なので、やはりそれは、高句麗人が祖国の方式で葬むられたと見るのが自然で、あえて想像するなら、国史としてやってきて亡くなった、**玄武若光**としか考えられない。

それでも、最近の発掘調査で、藤原京跡の輪郭が明らかになると、そこを南北に貫く朱雀大路正中線の延長線上に、文武天皇陵や天武・持統合葬陵の、墳墓らしいものがかたまっていて、その正中線上付近に、この鮮やかな壁画を持つ、高松塚古墳が位置しているので、天皇や皇族以外の墳墓は、設置されるはずはない、という見解がある。

しかし、墓地の設定方法を日本に教えたのは、半島からきた人々で、墳墓は展望の良い

高い地に置かれたので、天皇陵が営まれる前には、高句麗の人がこの見晴らしの良い地を見つけていて、自分達の首長を葬ったあと、やがて藤原京がきたようだ。

一方、同時代に日本に亡命していた、百済の王族の鬼室集斯という人物は、儒学の総元締めの官として優遇され、亡くなった後、儒礼で葬られ、廟所にはその神体として、儒礼の犠牲つなぎの石柱が立てられているが、高句麗の玄武若光の場合は、高松塚古墳に厚葬されていた様に思われる。

それでも、高松塚古墳の被葬者が誰であるにせよ、高松塚という華麗な壁画古墳の出現は、我々の歴史が、決して孤独なものではなく、東アジアの大きな広がりの中で、生き生きと息付いていた事を、改めて証拠つけてくれたが、特に、天智帝の頃は、日本が国際社会の紛争や争乱をもろに受けた、最初の時代だったのも、影響したのではなかろうか。

令和四年十一月